ISSN 0910—2396

# 野鳥だより —北海道—

第 113 号
編集・発行　北海道野鳥愛護会
発行年月日　平成10年 9 月21日

ミ ゾ ゴ イ

1997. 5. 10　羽幌町天売　撮影者　石 橋 美津子

〒004－0004　札幌市厚別区厚別東 4 条 2 丁目
2 －402

## もくじ


水鳥見るなら濤沸湖・濤沸湖探鳥スポット案内　川崎　康弘 …… 2
水面上50cmのアオサギの営巣　若林　信男 …… 5
野鳥記録三題　広報部 …… 6
新聞情報から　広報部 …… 8
探鳥会ほうこく …… 8
探鳥会あんない …… 11
鳥民だより …… 12


# 水鳥見るなら濤沸湖・濤沸湖探鳥スポット案内

川崎　康弘

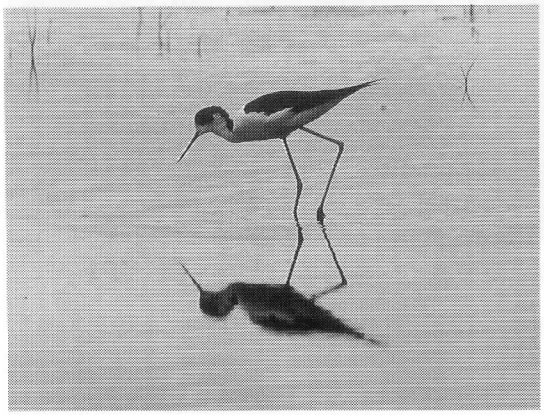
濤沸湖には年間を通じて種類・数ともに多くの野鳥が飛来する。特にシギ・チドリ類やガン・カモ類などの水鳥は非常に多く見られ、いわゆる「珍鳥」の記録も多い。

今回は対象を水鳥に絞って、それらの濤沸湖周辺における観察ポイントを紹介していこうと思う。

### (1) 白鳥公園周辺

国道244号を網走市街から浜小清水・斜里方面へ向かうと、「北浜」という地域を通過することになる。濤沸湖とオホーツク海はこの北浜でつながり、湖口の近くには冬季間オオハクチョウの餌付けをやっていることで有名な「白鳥公園」がある。

冬の間はオオハクチョウはもちろんのこと、マガモやオナガガモ、ホオジロガモ、オジロワシやオオワシなどが至近距離で見られ、コハクチョウもごく少数ながら見られる。ここで見られるコハクチョウは道北のクッチャロ湖にいるものとは違って人から餌をもらうことはなく、やや離れたところで体を休めているだけのことが多い。



セイタカシギ

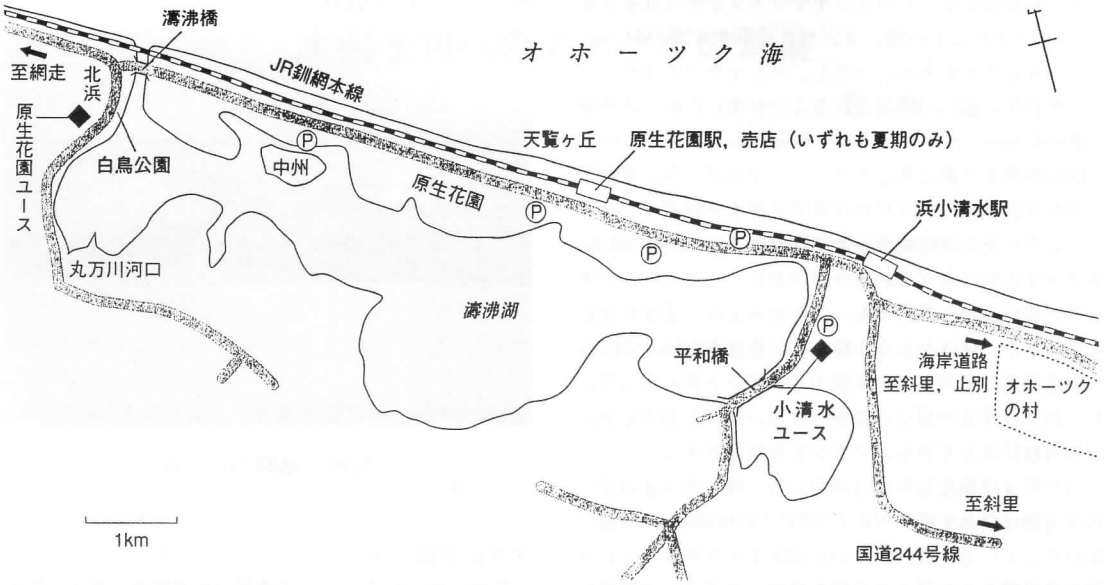
休憩舎から斜里岳を見通した方向には干潮時に干潟が広がり、数多くのシギ・チドリ類が観察できる。春は種類・数ともに秋の比ではないが、それでも綺麗な夏羽を見ることが出来るという意味で楽しい季節である。時期は5月中～下旬にかけてが良く、真っ赤なサルハマシギやコオバシギが複数羽観察されることもある。

秋は7月中旬からちらほらと姿を見せ始め、9月上旬（特に3日前後）にピークを迎える感がある。この時期は種類も数も豊富で、トウネンでは1日3000羽を数えたこともある。

トウネンの群中には毎年それぞれ2～3羽、年によっては5羽以上のキリアイとヘラシギが混在しているので気が抜けない。ヘラシギの場合、慣れてしまえば、サングラスをかけているかのような特徴のある顔のパターン（幼鳥の場合）から見つけるのが比較的容易であるが、嘴の先端に泥が付いたトウネンをヘラシギと誤認している向きも多いので注意が必要である。ポイントとしては、あまり嘴の形にこだわらないことである。はっきりと「ヘラ」を認識できる機会はむしろ少ない。

また、ここではオバシギとコオバシギが見られ、コオバシギの数がオバシギの数を上回ることも希ではない。両種がいる場合にはじっくり見比べてみたい。足の色の違いを記載してある図鑑が多いが、実際はあまりあてにならないことがはっきりと認識できるはずである。

干潟にいるメダイチドリやコチドリを1羽ずつ確認していくと、ハジロコチドリの姿を確認できるはずである。濤沸湖には毎秋季2～3羽が飛来し、春に観察されることもある。ハジロコチドリは白鳥公園周辺において観察されることがほとんどで、筆者はまだ（濤沸湖内の）他




BIRDER誌　1997年7月号から転載

のポイントで観察したことはない。

なお、白鳥公園周辺のポイントはこの干潟だけでなく、隣にある「ドサンコ花園牧場」の湿地帯も各種シギ類が入る好ポイントである。春にはオジロトウネン夏羽の小群や、セイタカシギが多い年で10羽ほど入り、秋にはハジロコチドリが見やすい場所を歩いていたりするので念のために見ておくことをお勧めする。

### (2) 丸万川河口

白鳥公園から湖に沿って南側へと延びる道を進むと、しばらくして小さな橋を渡ることになる。この橋がかかっている小さな流れが丸万川で、そのまま濤沸湖へとつながっている。

この丸万川の河口部（つまり、濤沸湖との合流部）付近にも干潟が広がり、シギ・チドリ類が群れをなす。ここに集まるシギ・チドリ類の多くは白鳥公園と行き来しているものであるため、一方のポイントに鳥がいない場合には、もう一方のポイントに集結している、ということが往々にしてある。

この丸万川河口周辺で多く見られる種としては、エリマキシギ、アオアシシギ、タカブシギなどで、タシギなどの普段は見にくい種も丈の短い湿地性草原の緑などをじっくり見ていくと比較的容易に発見できる。年によってはアメリカウズラシギが入ることもあり、また、親子連れのクイナも観察されることがある。

また、カモ類では、ヒドリガモの大群の中に純血の綺麗なアメリカヒドリがいたり、コガモの群れの中に亜種アメリカコガモがいることも多いので1羽1羽時間をかけてじっくりと確認していくことをお勧めする。

### (3) 駐車場

国道244号を浜小清水・斜里方面へ向かい、濤沸橋から1kmほど走ると、道の右側に駐車場がある。この駐車場こそが濤沸湖最大のウォッチングポイントである。

駐車場から湖方向を見ると、まず広大な中島が目に入る。その奥にも細長い砂州が延びており、干潮時にはこの周辺に広大な干潟が出現し、シギ・チドリ類が集結する。秋季には非常に多くの種類が観察され、それぞれ数も多いが、特に8月中～下旬にはチュウシャクシギの100羽を優に越す大群が見られる。

ここは干潟だけではなく、中島や湖畔の草原の中にも

セイタカシギ

注意が必要である。ヒバリシギやウズラシギ（近年少ない）、ムナグロなどの他、コシャクシギやオオハシシギが見られることがある。ただし、コシャクシギはチュウシャクシギの幼鳥と誤認されることが多いため、注意が必要である。

駐車場のすぐ前にあるクリークにはアオアシシギやタカブシギが多く、アメリカウズラシギやタシギなども見られるので充分に時間をかけて観察するのが理想である。クリークの中にコガモの群れがいたら、その中にシマアジがいないかどうかもチェックしてみよう。春なら発見も容易だが、秋はなかなか難しく、挑戦のしがいがある。

中島周辺はヒシクイが休憩するポイントにもなっており、秋季は8月下旬から観察できる。10月を過ぎる頃には相当数に達しており、マガンも少数混在する。

ハクチョウ類は毎年10月初旬に第一陣が飛来するが、飛来当初は白鳥公園に入らず、主にこの中島周辺で採餌・休息をしている。濤沸湖といえばオオハクチョウというのが通説であったが、ここ数年はコハクチョウの飛来数が増加する傾向にあり、特に早い時期にはオオハクチョウよりも多く見られるようになってきている。

### (4) 平和橋

国道244号を浜小清水・斜里方面へと走り、浜小清水市街に入る直前を右折して浦士別方面へ向かうと、しばらくして濤沸湖にかかる橋がある。この橋を挟むようにして駐車帯があるので、車をそこに停めて観察することができる。

筆者を含め、地元で古くから探鳥を続けている者の多くは、この平和橋から東側に広がる一体を通称：裏濤沸と呼び、橋から西側、国道から見える範囲に広がる大部分を通称：表濤沸と呼んでいる。この橋一体は湖口から最も離れた地域であるため、あまり潮の満ち引きの影響を受けず、淡水度が高くなっている。このため。見られる鳥の種類もこれまで紹介したポイントとは多少異なっており、濤沸湖に来たからには見ておきたいポイントである。

春から秋にかけての時期は一見して鳥の姿が少ないように思えるが、のんびり待っているとヨシ原の陰からマガモやオカヨシガモ、カイツブリなどの親子が現れ、心を和ませてくれる。また、アジサシ類の姿があればじっくりと観察してみよう。大半はアジサシであるが、ここ数年、春・秋の渡りの時期にはハジロクロハラアジサシの姿を見ることが続いており、実は以前から定期的に飛来していたのではないか、と考えられている。97年の晩夏には日替りメニューでクロハラアジサシとハジロクロハラアジサシが出現（どちらも幼鳥）したが、これらの識別も容易ではないため事前に予習しておくなど万全の構えでいたほうが良い。

初秋・湖畔の夕ぐれ

### 〈さいごに〉

最初に書いたように、濤沸湖は鳥の種類・数ともに大変多い名探鳥地である。しかし、「鳥が見やすいか」といえば、決してそうではない。むしろ「見にくい」部類に入るだろう。これは「姿が見えない」わけではなく姿が見えていても「識別しにくい（なんだかわからない）」のである。理由には様々あるが、決定的な要因は「鳥との距離が遠い」ことであろう。国定公園であり、さらに湖畔は牛馬の放牧地として利用されていることなどもあって、一般人の立入りは規制されているため、他の探鳥地のように鳥が遠いからといって草原や干潟まで入り、近寄って観察する、というわけにもいかないのである（個人的にはそれが当然だと思うが）。

そういった意味で、濤沸湖は鳥見を始めたばかりの方が単独でやってくるにはいささか都合が悪い場所であるといえる。特にシギ・チドリ類を始めとした水鳥類を見たい・覚えたい、という目的をもってこられる場合には、それらの識別に慣れた人と一緒に来られるのが良いだろう。ただもちろん、その場合でも識別不可能な鳥が一つか二つ出るのが普通である。観察の結果「これだ」と思う種があったにしても、少しでもひっかかる点があるのであれば無理に名前を付けたりはせず、不明のままにしておく。これがシギ・チドリ類だけではなく、野鳥観察の基本中の基本であることはいうまでもない。

この点に留意すれば、あとはもうのんびりどこまでも牧歌的な風景と緩やかに流れる時間を楽しむつもりで一日を過ごしてもらいたい。きっと「素晴らしいところだ」と思っていただけるものと確信する。

〒099－4115　斜里郡斜里町光陽町31－16

# 水面上50㎝のアオサギの営巣

若林信男

幌向ダムは岩見沢市唯一のダムである。

1990年から少数のアオサギが営巣し始め、毎年少しずつ個体数が増え続け1997年には、フィールドスコープで、約三十以上の巣を数えられるようになった。親鳥が営巣木に舞降りる場所などを見ると、見えない木々の陰にも相当数の巣があるものと見られる。(最良の観察場所から営巣場所まで約200m)

地元の人達は、毎年の風景として楽しみにしている人たちが大勢いる。

今年3月中旬に十数羽ほど居て、4月上旬に観察にいくと、毎年営巣していた場所には1羽のアオサギも居なくなっていた。焦って数日ダム周辺を探したが何処にもいなかったが、灯台もと暗しと言うのかダム中央の水抜き塔の周辺を取りまいている流木避けのブイの上にアオサギ9番(つがい)が立派な巣を構えているではないか。観察場所から約150m位、水面より約50㎝、一個1.5m×2mのブイが、数十個鎖のような物で繋がっている。

当初、9番あった巣も、強風でブイが大きく揺れて3番の巣が水面に落ちて卵からかえったばかりの雛が巣もろとも水面に落ち、だめになった。被害にあった親は、1、2日その場所から動かず、水面をじっと見つめていた姿は痛々しかった。

強風などの揺れなどに耐え残った7番の巣は、順調に雛が育ち、互いの巣の中で元気良く、羽ばたきとはいえぬ行動を見せてくれた。観察中にチヨットした事件が起こった。ある程度大きくなってきた雛達が、狭い巣の中で互いに羽ばたきをしている最中、互いのはねと羽がぶつかりあい1羽が水面に落ちると同時に他の親鳥と雛たちが一斉にグァワー・グゥワー・グゥワーと鳴き声とは思えない声で騒ぎ出した。落ちたアオサギは巣より2、3mの所で頭を上げて必死に羽や足をバタバタしながら巣に近づこうとしているが逆に巣から離れていく。この間約20分相変わらず他のアオサギたちはグゥワー・グゥワーと激しく鳴いているが、次第にガンバレ・ガンバレと励ましの声のように聞こえる。

風が少し強くなり何かのゴミが風に流されるようにアオサギが次第に巣に近づき始める。賢明に羽と足をバタバタバタさせながら巣あるブイ迄たどり着いた。上手にくちばし、羽、足を使い5分くらいでようやく自分の巣へたどり着いた。約1時間くらい巣の中でじっとしゃがみ込んだままであった。

観察中、幾度ものカラスの空中攻撃やトビの空中攻撃をかわし、雛が水面に落ちるという事件もあったが、無事に巣立ちを迎え一安心であった。

巣立ちの瞬間を見たが、18羽の雛しか見ることができなかった。これがスリル満点の巣立ちであった。

木の上からの巣立ちなら落ちる速度がある程度羽に浮力を与えるのだろうが、水面上50㎝の上で育ったアオサギは、一生懸命、一生懸命、一生懸命、力一杯、力一杯、力一杯、目一杯、自分の力を出さなければ水面に落ちてしまう。

観察した雛たち全部が、水泳のジャンプみたいな巣立ちで、水面より1m以内までの高度しか稼げない。足を水面につけながら飛んでいる幼鳥がほとんどだ。2羽だけが陸よりも1、2m位の所で力つき水面にボチャン、2羽とも自力で岸辺にたどり着いたが、前途多難の巣立ちに思えた。

繁殖場所は、ダム堤防の対岸で急斜面なので、一般の人はなかなか出入りできる場所ではない。

なぜ昨年までの営巣場所を捨て、このような場所で営巣したのかは定かではないが、今までの営巣場所を放棄した原因と思われる下記の3点が聞き取り調査で上げられた。(意見を聞いた人数、14人)

1. 昨年秋遅くに営林署の間伐があった。
2. 幌向ダム周辺には、熊が生息していることが知られている。♂2頭、♀1頭の内♂1頭は、広範囲に移動個体がいる。
3. 春、かなり多くの山菜取りのベテラン?の人たちが入る。＊＊一番多く聞かれた＊＊

一番気になるところだが、昨年の営林署の間伐はアオサギがいなくなった秋遅くにしたため騒音などの影響が

ない。また、間伐の場所と営巣場所は背中合わせになる距離があるので、これからも営巣場所としては影響がないと思われる。

繁殖場所はかなり急斜面なので、四つ足の熊が下っていくことができないと思う。

聞き取り調査で一番多かったのが、山菜取りである。地元の人たちよりも、他の町からの人たちが（商売にしているプロの人たち？）が、多く入山しているという。ダム管理人の方が、山菜取りの人が２、３人営巣場所に入っているのを目撃している。現に私自身も今年春早くに営巣場所付近の斜面を下りていく人を目撃している。（新聞では、熊の影響ではないかと言ったが、私自身の仕事の関係上の事で御察しください）

以上のような事が、営巣場所放棄の原因だと思われます。

また、今回このような水面上の常に静かに動いている浮遊物（ブイ）になぜ営巣したかは、アオサギのみ知ることと思うが、私たち鳥民はアオサギは昔から樹上で営巣すると信じていました。（一部地域で、地上での営巣記録がある。）今回のような営巣の仕方は、珍しい行動だと思うが、わずかな季節の味覚を求めすぎた、人間が招いたアオサギの抗議行動ではないかと思う。

今回の出来事で一番がっかりしているのは、私たち鳥民よりも、間近かで季節の到来と安らぎを与えてもらっていた地域住民ではないかと思うと共に、一般の人が、簡単に林道の鍵を買うことのできる事を何とかしなければならないと思える。

来年どうなるか解らないが、アオサギが幌向ダムに戻ってきて営巣することを願う。

七つの巣の幼鳥の数は、四つの巣で４羽、二つの巣で３羽、一つの巣で２羽、他の岩見沢野鳥の会会員の巣立ち確認を含めると観察してきた幼鳥全部24羽が無事に巣立ったことになる。

〒068－0811　岩見沢市美園１条２丁目１番25号
☎0126－24－3119

# 野鳥記録三題

## 小樽高島漁港でコケワタガモ

冬鳥として道東を中心とした太平洋・オホーツク海沿岸には飛来するが、日本海側ではほとんど観察例のないコケワタガモが、1998年２月22日に小樽市高島漁港を訪れ、カメラに収められた。すでに新聞報道はされているが（北海道新聞1998年３月１日）、あらためて紹介する。

22日に同漁港でシノリガモの群れの中にいるコケワタガモ雄１羽を梅木賢俊さん（日本野鳥の会小樽支部、愛護会会員）が見つけ、連絡を受け駆けつけた渡辺俊夫さん（同、同）が写真撮影した。

コケワタガモはシベリアやアラスカで繁殖し、カムチャッカ半島から千島列島で越冬する。そのため根室市納沙布岬周辺から霧多布あたりにかけては冬期間定期的に観察される。渡島までの太平洋沿岸、また宗谷までのオホーツク沿岸でも稀に見られるが、日本海側では20年程前に留萌地方で観察されたという一例のみである。

コケワタガモ
撮影者　渡辺　俊夫

このコケワタガモは翌23日まで同所におり、その間何人かの探鳥家の目を楽しませたが、24日には姿が見えなくなったということである。港や沿岸には毎冬さまざま

な海ガモ類が飛来するが、時には思いがけないものが迷行してくることもある。それがまた厳寒の中でも探鳥に励む理由の一つかもしれない。

### 石狩市と稚内市でタンチョウ

道東で生息する特別天然記念物のタンチョウが、1998年5月23日に石狩市、翌24日に稚内で確認された。

23日午前5時頃、石狩市生振の石狩川左岸湿地で休息している1羽を、愛護会会員の広川淳子、新城久、樋口孝城の3氏が観察した。その個体は同日未明から同所にいたと思われるが、午前7時頃には数百m離れた河川敷草地に移動し、短時間ではあるが採餌と思われる行動をした後、午前8時前にはいずれにか飛び去った。石狩へのタンチョウ飛来の確認は1976年3月6日、今回とほぼ同じ場所でのもの（北海道新聞1976年3月7日）以来、22年ぶりである。

一方、稚内市では24日午前5時半頃、ノシャップ岬に近い自衛隊稚内分屯地内の草地で確認されている。1990年に宗谷管内猿払村で目撃されたことがあるが、稚内市での確認は初めてである。また観察された個体は生後1年くらいの亜成鳥とみなされている（北海道新聞1998年5月25日）。

タンチョウの専門家である専修大学北海道短期大学の正富宏之教授（愛護会会員）によると、石狩市の個体は昨年（1997年）生まれの満1才であり、恐らく稚内の個体と同じだろうとのことである。もし同個体だとして、それがどこから（道東からと考えるのが普通であるが、大陸から飛来した可能性も決して否定できない）、どのような経緯、経路で来たか。また稚内市から次にはどこへ行ったのか、興味はつきないところである。

### 積丹町でクロジョウビタキ

北海道ではもちろん、全国的にもこれまで極めて稀にしか観察されていないクロジョウビタキが、1998年5月11、12日に積丹町来岸で佐藤領江子さん（日本野鳥の会小樽支部会員）によって、佐藤さん宅の裏で観察・写真撮影された。佐藤さんからいただいた観察報告は以下のとおりである。

「5月11日、午後3時頃にチラリと見たものの、数秒しか目認できず、何の鳥か判らず、夕刻再び姿を見せたのでスコープで確認、図鑑でクロジョウビタキか？と思うが、この時もすぐに姿を見失う。翌日12日終日裏に姿を見せてくれたので写真に撮る。見ていた限りでは行動はジョウビタキに似ていて、杭や枝に止まっては尾を動かす。しかし、声はジョウビタキの澄んだようなヒッヒッというものではなく、もっと濁っているように聞こえたがはっきりせず、夕方まで姿があり、翌日からは見えなくなる。」

タンチョウ
撮影者　新城　久

この個体については後日、日本鳥類保護連盟の柳澤紀雄氏によってクロジョウビタキ（雌なのか雄の若鳥なのかは不明）であるとの改めての確認があり、北海道新聞後志版に紹介された。クロジョウビタキの記録は全国でも数少なく、フィールドガイド日本の野鳥増補版（高野伸二著、日本野鳥の会、1994年）には、「1984年以後石川県軸倉島、山口県見島、埼玉県などで数回の記録されている。」と記載されている。また、北海道では根室管内で2例の記録があるが（北海道地域別鳥類リスト、日本野鳥の会北海道ブロック支部連合協議会、1991）、近年の記録は見当たらず、今回のものは非常に貴重な記録と言えよう。

クロジョウビタキ
撮影者　佐藤　領江子

（文責：広報部）

## 新聞情報から

**カワアイサ市街地の森でひっそり営巣**（音更町）

冬鳥として北海道などに飛来し、道内でも少数が繁殖するとされるカモ科の野鳥カワアイサのかわいらしい親子の姿を十勝管内音更町市街地の「音更神社の森」で同町在住の矢部志朗さんがカメラに収めたという。カラー写真には雌親のまわりに６羽のかわいいヒナが写っています。

カワアイサの姿を確認したのは10年ほど前からで、今年も森の木の高さ約10ｍほどの樹洞に巣を作っているの見つけ、５月25日に誕生直後と見られる６羽のヒナと親鳥が一緒に水辺にたたずむ様子を撮影したという。

音更神社の森は、四方を道路に囲まれており、藤巻裕蔵・帯広畜産大学の教授によると、市街地で生息・繁殖するのは珍しいという。

（北海道新聞　６月３日）

**アカゲラ育てるコムクドリ**（芽室町）

コムクドリの親鳥がアカゲラのヒナに餌を与えて育てる光景がこのほど十勝管内芽室町で撮影されたという。

撮影したのは、帯広市在住の山岡進さんで、６月上旬芽室町内の防風林で枯れたドロノキの幹にアカゲラのヒナ２羽がいる巣穴を見つけた。母鳥らしい雌のアカゲラは１時間に一度ほど餌を運んでくるのに対し、コムクドリの雌は20分おき。アカゲラは１羽が巣立った後、姿を見せなくなった。しかし、コムクドリはその後も、もう１羽に餌を運び続けたという。

帯広畜産大学の藤巻裕蔵教授（動物生態学）は「コムクドリは他のつがいのヒナを育てる「協同繁殖」という行動をとることがあるが、別の種のヒナを育てた例は聞いたことがない。親としての本能が、アカゲラのヒナの鳴き声で刺激されたのかもしれない」と話している。

（北海道新聞　７月23日）

文責：広報部

## 野幌森林公園、春の一日

10．５．３

井　上　公　雄

前日は一日中雨の降る寒い日であった。夜半から雨があがり、曇り空ながら回復に向かう空模様の中、ハシブトガラ、ヤマガラ、イカル、ウグイスなどの美しい囀りの中のスタートになった。ユズリハコースに入ると間もなく、前方の道端でイカル、アオジが仲良く食事中であった。道一杯に立ち止まったスコープの放列にも臆せず、地面を無心についばむ姿を鮮明に捉えたスコープを、代わるがわる覗かせて貰ったビギナーから、感動と喜びの声がもれ、早くも探鳥の楽しみを実感した様子であった。

やがて、反対側からの人の気配に、飛び去って間もなく、林の中からコマドリの鳴き声が聞こえて来た。

この時期、渡りのための、通過のひととき姿が見えないのが残念と思っている間に、声もなく４～５羽のメジロが高い枝先を渡り移って行った。

センダイムシクイ、クロツグミ、アオジ、ウグイス、それぞれに特徴のあるカラ類の鳴き声、四季美コースへの分岐点付近で、柳の枝を飛び回るこの春初めてお目にかかった美しいキビタキの姿、縄張りを主張して鳴く、カイツブリの声に誘われて、大沢の池の生い繁ったブッシュの中に見え隠れするオシドリの姿や、道端の其処ここに咲くニリンソウ、ヒトリシズカ、僅かな違いで種類が異なるエンレイソウや、スミレの類の説明に耳を傾け、沢の流れに目の覚めるような黄色のエゾノリュウキンカ、樹々の若芽が広がり始めた森など、自然の営みを目から耳からからだ全体で春を感じ、役者が勢ぞろいした感じであった。一周して記録された種類が31種、この時期の顔触れは一応揃った形ではあったが、近頃個体数が目立って減少してきているのが、気掛かりなことであった。

〒062－0031　札幌市豊平区西岡１条７丁目１－14

〔記録された鳥〕カイツブリ、トビ、オシドリ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ミソサザイ、コマドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、シメ、イカル、ニュウナイスズメ、カケス、ハシブトガラス。以上31種

〔参加者〕橋本　修、中山妙子、川守田順吉、佐藤　勇、松原寛直・敏子、岡田幹夫・恵子、蒲澤鉄太郎・則子、山田良造、矢島慶子、久保田喜代美、高橋利道、真壁静

子、石井アツコ、久野裕之、佐々木充人、沢田浩一、菅間慧一、井上公雄、大賀　浩、斉藤正雄、田口嘉明、高栗　勇、横井澄子、西村博伸、西根昭吉・紀子、戸津高保・以知子、野坂英三、後藤義民、香川　稔、北原英幸、霜村耕介、船越昭則、以上37名
〔担当幹事〕井上公雄、後藤義民

## 千歳川周辺

10. 5. 9～10

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、ハイタカ、マガモ、キンクロハジロ、キジバト、ツツドリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ミソサザイ、アマツバメ、クロツグミ、アカハラ、アオジ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、メジロ、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、シメ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス。以上41種
〔参加者〕久野裕之、佐々木充人、金高佐奈、野表左奈・智恵子、浜塚恵美、甚野幸子、松尾治子、蓮本信夫、大町欽子、杉田範男、山田良造、高栗　勇、木村義道・滋子、松原寛直・敏子、鈴木繁雄・英子、蒲澤鉄太郎・則子、坂田孝弘、白澤昌彦、栗林宏三、以上24名
〔担当幹事〕白澤昌彦、栗林宏三、蒲澤鉄太郎

## 鵡川探鳥会

10. 5.17　戸　津　以知子

鵡川駅での集合時よりあやしげな空模様……。私も愛護会の探鳥会に参加する様になってから随分とたっているのですが、シギ、チドリ類は見る機会が少なく、森林の鳥に比べるとさっぱり判らない。今日も春の渡りのシギ、チドリ類との出会いを楽しみにして、心の中に何種類かをチェックしつつ牧場へと向かいました。ヒバリの声を聞きながら川の方へと進んで行くと雨がパラパラ落ちて来て、双眼鏡もプロミナも曇り、状況はあまり良くない。ユリカモメ（夏羽で非常にきれい…）を見ていた時、上空に30数羽のチュウシャクシギの群れ。ホウロクシギも一羽一緒にいる。草地に降りたり又飛んだりを何度もくり返す。口笛の様な声もなかなか良かった。しかし依然として雨が降り続き雨足も強くなる。こんな雨の中をなんと物好きな否鳥好きな人達よ……と思いつつも私はギブアップ寸前。「引き返します」の幹事さんの声に内心“ホッ”。帰りに牧場出口附近でツバメチドリを見る。羽の色も夏羽の奇麗な個体で数年前にもこの場所で観察した事があった。鵡川もこのところシギ、チドリの減少が進んでいる様で寂しく思っていたので今日のチュウシャクシギの群れとツバメチドリには感激しました。
〒062－0911　札幌市豊平区旭町４丁目１－14
〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、ヒドリガモ、コガモ、ムナグロ、コチドリ、チュウシャクシギ、ホウロクシギ、キアシシギ、オオジシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ユリカモメ、キジバト、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、カワラヒワ、シメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト、ツバメチドリ。以上26種
〔参加者〕鷲田善幸、板田孝弘、山本昌子、小堀煌治、沢部　勝、森田新一郎、北山政人、山田良造、井川修二、戸津高保・以知子、樋口孝城・陽子、井上公雄、以上14名
〔担当幹事〕樋口孝城、井上公雄

## 植苗、ウトナイ湖畔探鳥会

10. 6. 7　吉　田　　隆

好天に恵まれ朝５時頃目が覚めた。学童が遠足に行くような心境である。しかも遠出なので地理的な不安はもとより初参加なので、どんな草原の鳥たちに会えるのか心が弾んだ。窓越しに鳥の声もきこえてきたが、今日の探鳥会なるものを想うと今の比ではなかろうと勝手に考えた。期待に胸おどった。ウトナイ湖周辺なので水辺の鳥が多かろう。いや草原なので山野の鳥の方が多いかも。

植苗駅前はあたかも自然観察する人々の駐車場とでも云うべく車が占領していた感がある。年に一度の集合場所である。以心伝心、会員にはあい通じる何かがあり集まった人々もひと言ふた言挨拶を交わす。車できたひとがほとんどで汽車での人は見かけなかった。

集合時間通り責任者のあいさつ説明あり、駅を背にして草原に向け歩きだした。駅前でもカッコウの鳴声を聞いたが50－60メートル進んだ所で鳥たちの声が聞こえ始めてきた。地面に草花樹木、その周りに小さな虫たちも忙しそうに飛んでいた。

草原に入るにつれて生き物の活動が活発であることが伝わってきた。生存しているこの短期間にいや短時間に生命を保ちながら子孫存続のために、しかも天敵からちいさな身を守りながら自然の中で闘っているのだ。ときには鳴声をかえたりするのかもしれない。小形の鳥が盛んに鳴けば他の大形の鳥に判ってしまい、かえって居場所をおしえているのではと疑問におもったりした。渡り鳥だと思っていたコブハクチョウでも居心地よくて棲みついたようだときいて‘住めば都’的な野鳥もいるのかもしれない。

愛護会員の皆様は鳥の名前に困っている人がいれば親切に快くおしえてくれる。花や樹木でも誰かれなく、周りからもアドバイスあったりする。私は居乍らにして知識人になる気負いのない肩のこらないさり気ない言葉のやりとりが心を和ます。難しい専門用語が出ないのはより自然を熟知した面々と推察した。小生、今後の観察力は鋭敏になっていくことでしょう。

数日前の雨の影響で通路も変わっていた様です。自然環境は決して以前とは同じ状況ではなく、絶えず時々刻々変化しているのがうかがえる。まわりを見渡すと自然の息吹きがわれわれに語りかけ、恰も教えているかの如く、風が音だけをのこして通り過ぎていった。

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、オジロワシ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ヒヨドリ、アカモズ、ノゴマ、ノビタキ、クロツグミ、アカハラ、ウグイス、エゾセンニュウ、コヨシキリ、センダイムシクイ、キビタキ、ハシブトガラ、メジロ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、シメ、ニュウナイスズメ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、オジロワシ、ハイタカ、ヨシガモ、カルガモ。以上39種

〔参加者〕大村正道、高橋利道、平間健治、大西裕子、野口正男・きよ、蒲澤鉄太郎・則子、吉田　隆・幸子、今井純生・ちえ子、雪田昭治・久子、田中志司子、川上マーク・ブラジル、ビッキー・リファズ、小野木弘司、羽田恭子、小堀煌治、鈴木克司、犬飼　弘、内田　孝、山田良造、栗林宏三、大賀　浩、鈴木繁雄・英子、久田伸一、船越昭則、戸津高保、竹内　強、山本やす子、井上公雄、以上35名

〔担当幹事〕竹内　強、栗林宏三

## 東米里探鳥会

10. 6.14

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、マガモ、コチドリ、イソシギ、キジバト、カッコウ、アリスイ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、アカハラ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト。以上26種

〔参加者〕板田孝弘、内川雄平、小野木弘司・幸子、大賀　浩、蒲澤鉄太郎・則子、鎌田　博、北山政人、栗林宏三、坂井伍一・俊子、佐藤　勇、菅間慧一・きみ子、鈴木繁雄・英子、高栗　勇、高橋　忍・紀倭子、高橋利道、辻　勝司、戸津高保・以知子、中正憲佶・弘子、野坂英三、蓮本信夫、羽田恭子、原イチ子、速藤尹希子、久田伸一、深谷正男、松原寛直、村上トヨ、山田良造、吉田　隆・幸子、以上38名

〔担当幹事〕戸津高保、野坂英三

## 念願の夜の探鳥会に参加して

### ― 平和の滝（夜）―

10. 6.20　坂 元 直 人

愛護会に入会し３年が経ちましたが、仕事の都合などで、なかなか探鳥会に参加できません。特に夜の探鳥会は年に一度ですから今回も諦めていたところ、大雨のおかげで仕事（生態系調査などをやっています）が早く切り上がり、一目散に作業車で平和の滝に向かうこととなりました。集合場所の駐車場に近づくと、リュックサックを背負い、胸に双眼鏡らしきものを下げ、ズンズンと坂を登って行かれる愛護会のメンバーの方の姿を見かけ、「ああ、やっと夜の探鳥会に参加できた」という喜びがムクムク湧いてきました。ところがなんと集合場所には人影がまばらです。数えてみると５人。まさかと思えば、実はこの日はサッカーワールドカップ日本代表の試合が中継される日、しかも天気は朝から続く雨。この日の探鳥会に集合したメンバーは僅か７人だったのです。しかも駐車場では直ぐに解散という雰囲気が漂っていた頃、先ほど坂道をグングン上ってこられた方が、「さあ始めますか」という無言のオーラを発して到着したことにより、会は予定通り決行となったのです。ちょうどその時、駐車場の中央にキセキレイが現れ、しっぽを振っておいでおいでと言っていたのも見逃せないポイントです。

夜の探鳥会の人気ベスト３と言えばコノハズク・ヨタカ・トラツグミだと思いますが、西区に住む私は５月中旬にこの３種に出会うべく、家族同行で事前調査に行っておきました。平和の滝の南、宮城沢川に向かう一本道の行き止まりはお墓になっています。実はこの３種の定点調査には平和の滝ではなくこの地点が最高の場所なのです。この日を境に我が家の６才と４才の娘は、あそこへ連れて行くと言えば必ずおとなしくなるようになりました。なお、独身の会員の方には二人きりの「宮城沢夜の探鳥会」をお勧めします。話がそれました。この下見の際に平和の滝にも行ったのですが、夕方になると早朝と同じように小鳥達のさえずりが目立ち始めました。その中に、本州でよく耳にしたチョットコイ・チョットコイという大きな声が頻繁に聞こえてくるのです。これはビックリ！札幌でコジュケイ確認と思いきや、実はその声の主はキビタキでした。鳴き真似はおもしろいですね。

今回の夜の探鳥会では、残念ながらヌエ（トラツグミ）の声は聞けませんでしたが、いつまでも耳に残るコノハズクの声はしっかり確認できました。

〒063－0845　札幌市西区八軒５条西２丁目３－23－602

〔記録された鳥〕カモＳＰ、ツツドリ、コノハズク、ヨタカ、アカゲラ、イワツバメ、キセキレイ、ヒヨドリ、コルリ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、キビタキ、オオルリ、アオジ、クロジ。以上16種
〔参加者〕坂元直人、安　真一郎、田子元樹、中正憲佶・弘子、戸津高保・以知子、以上７名
〔担当幹事〕戸津高保、中正憲佶

## 福移探鳥会

### ― 探鳥一年生のひとりごと ―

**10．7．5　柏葉勝利**

何となく「野鳥を見てみたい」と思い立った今年、親切な道場先生に誘われて“西岡水源地”“円山公園”“ウトナイ湖”“宮島沼”と次々に手ほどきを受け、感動の連続のうちに今回の福移探鳥会にも参加させて頂きました。さすがに５回目ともなれば重い双眼鏡の小さな窓の中に鳥を捕らえる腕（眼？）も上達して、以前ほど「ホレ、あそこ！あそこ！」と指さす彼方、「ドレ、どこに？どこに？」と盲滅法（メクラメッポー）に双眼鏡を覗き回ったあげく、点線の鳥（飛び去った鳥）の確認に終わる。自ら言うところの「残念回数」はいくらか減ったような気がします。何せ、鳥を実際の状態で観察させてもらうのに必死なのと、記憶中枢の空洞化いちじるしい最近の状況からして、鳥の名前を覚えるのはハナから諦めておりまして、今日はいろんな鳥に会えたなあーという満足感で十分に心癒されるのです。スコープを通して目に映る鳥達の可愛い姿と、雄弁なトリッチトラッチを楽しませてもらう喜びは他に例えようもありません。確かに肩はコリ、首はハリ、眼は涙目になり、もうヨレヨレに疲れてしまいますが、代償としては十分にオツリが来ます。

これからも教え甲斐の無い生徒の私ではありますが、万年留年のまま「いろんな鳥」を見に出かけることでしょう。野鳥愛護会の皆様と、またどこかでお会い出来る日を楽しみにしています。もし涙目の男を見かけましたら、励ましの一言をお願い致します。

とうとう野鳥の名前を一つも書き出すことが出来ませんでした。ご免なさい！

〒005－0801　札幌市南区川沿１条３丁目11－15
〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、コハクチョウ、マガモ、カルガモ、イソシギ、キジバト、カッコウ、カワセミ、アカゲラ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、アカハラ、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ダイサギ。以上35種
〔参加者〕犬飼　弘、村上トキ、今村淳子、香川　稔、山田甚一・れい子、吉田　隆・幸子、武沢和義・佐知子、蒲澤鉄太郎・則子、三船喜克・幸子、松原寛直・敏子、戸津高保・以知子、道場　優・信子、山田良造、佐々木充人、蓮本信夫、藤川恒代、野坂英三、田中志司子、高栗　勇、橋本ひろみ、小堀煌治、板田孝弘、横井澄子、樋口孝城、吉田慶子、小泉三雄、内川雄平、速藤尹希子、斉藤道子、栗林宏三、久野裕之、柏葉勝利、今村三枝子、金高早苗、高橋利道、古謝静枝、橋爪陽子、岩崎孝博、羽田恭子、小野寺まゆみ、井上公雄、以上49名
〔担当幹事〕道場　優、井上公雄

---

**【宮島沼】**平成10年10月11日（日）

ユーラシア大陸北東部の北極圏での短い夏の繁殖を終え、主に本州各地の越冬地へ向かう途中宮島沼に多くのマガンが立ち寄り休息します。春に比べ滞在日数は短く次々と南へ向いますので、春程の大群にはなりませんが生まれて初めての渡りをする今年生まれた幼鳥も多く見られます。マガンばかりでなく各種カモ類も南の越冬地を目指しています。ハジロ、ミミ、アカエリ、カンムリカイツブリなど、各種カイツブリや時にはシギ・チドリ類が観察されることもあり楽しみです。

集合＝午前10時　大富会館前
交通＝ＪＲ岩見沢駅バスターミナル発　中央バス月形行、大富農協前下車、徒歩15分

**【野幌森林公園】**平成10年10月18日（日）

朝夕の冷え込みが樹々の葉を様々な色彩に染め、季節の移り変わりを実感するころです。ひと夏を過ごした夏鳥たちは南へ急ぎ、北の方から冬鳥が渡って来ます。

留鳥のキツツキ、カラ類などのほかツグミ、レンジャクなどが姿を見せはじめる時期でもあります。夏場に比べ種類は幾分減り20～25種類ほどが記録されます。秋の自然に囲まれた一日を一緒に過ごして見ませんか。

集合＝午前９時　大沢口駐車場入口
交通＝夕鉄バス　新さっぽろ駅バスターミナル発
「文京台西行き」大沢口公園下車、徒歩５分

**【ウトナイ湖】**平成10年11月８日（日）

ガン・カモ類の多くは北極圏の高緯度地方が繁殖地で今年も繁殖を終えたガン・ハクチョウ・カモ類が２千km余りの長旅の途中ウトナイ湖で羽を休めています。ひと夏を過ごしたアオサギも南へ向い少なく、観察される主

なものはオオハクチョウ、コハクチョウ、ヒドリガモ、ハシビロガモ、ヨシガモ、コガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサなど25～30種になります。初雪の便りも聞かれるころで、湖面を吹き渡る風は寒く充分な身仕度をして参加しましょう。

集合＝午前９時40分　ウトナイ湖畔（旧レイクランド側駐車場から徒歩２分）

交通＝道南バス（苫小牧行き）新千歳空港発９時10分ウトナイ湖・レイクランド前下車

**【小樽港】**平成10年12月13日（日）

海鳥の観察には冬がベストシーズンです。小樽は港・漁港・岩場と観察ポイントに恵まれ、それだけに種類も多く終わった後の充実感は格別です。それらのポイントを貸切りバスで移動しますので楽々で無駄のない探鳥が出来ます。主なものはアビ、オオハム、カンムリ・アカエリ・ハジロの各カイツブリを始めホオジロガモ、コオリガモ、シノリガモ、ウミアイサ、ウミガラス、ケイマフリ、ウミスズメなど30種前後が記録される実り多い一日になります。なにより暖かい服装が大事です。

なお、申込が必要ですので予め連絡をお願いします。

集　合＝午前10時　ＪＲ小樽駅改札口付近

参加費＝バス代1000円程度　受付時にお支払い下さい

申込先＝白澤宅　**☎011－563－5158　18時～20時まで**

**【野幌森林公園を歩きましょう。】**

平成10年10月４日（日）　平成10年11月１日（日）

平成10年12月６日（日）

集合＝午前９時　大沢口駐車場入口。

交通＝夕鉄バス（文京台線）新さっぽろ駅バスターミナル　８：23分発大沢口公園入口

○何れの探鳥会も余程の悪天候でない限り行います。

○観察用具・図鑑、筆記具・昼食、雨具などをご持参下さい。

○探鳥会の問い合わせは**011－854－9309**　井上宅又は**011－563－5158**　白澤宅までお願いします。

# 鳥民だより

## 平成10年度「野鳥のつどい」写真展　出展リスト

| | | |
|---|---|---|
| 川上秀幸 | オナガガモ | ツルシギ |
| 小堀煌治 | トラツグミ | アトリ |
| 佐藤　勇 | ヤマセミ | アメリカコハクチョウ |
| 佐藤幸典 | ツルシギ（２点） | |
| 志田博明 | アトリ | スズメ（アルビノ） |
| 渋谷信六 | マガン | イソシギ |
| 新城　久 | マガン | キンクロハジロ |
| 富川　徹 | コムクドリ | オオコノハズク |
| 三船喜克 | オオマシコ | ヤマシギ |
| 山田良造 | ヒレンジャク | ノビタキ |

以上　10名　20点

## ◇◇◇ 野鳥だより原稿募集 ◇◇◇

北海道各地の探鳥地紹介、野鳥観察記録、希少種観察記録、その他野鳥に関する話題などの原稿を募集しています。会員以外の方の投稿も歓迎です。原則として投稿原稿はそのまま掲載しますが、以下のことをご了承下さい。

・編集の都合上、掲載が何号か遅れることがあります。

・野鳥観察記録において、北海道未記録種や過去に極めて記録が少ないものなどが含まれている場合、投稿された方に確認を求める場合があります。

・希少種観察記録は、全国的に見た場合に希少でなくても、北海道では珍しいもの、また北海道の地域的には珍しいものも含みますが、写真などの具体的証拠があるものに限定させていただきます。なお、新聞などに既発表のものでも構いません。

原稿は広報代表・樋口孝城

〒002－8065　札幌市北区拓北５条２丁目10－17

宛お送り下さい。

### ◆新入会員名簿

内田　孝　〒063－0821　☎663－9861
札幌市西区発寒１条２丁目７－１

高　誠一　〒006－0004
札幌市手稲区宮の沢４条３丁目303－6－504

片山　実　〒007－0870　☎782－6406
慶子　札幌市東区伏古10条２丁目15－10

吉田　隆　〒064－0822　☎611－6365
幸子　札幌市中央区北２条西26丁目２－６

田辺　毅　〒098－5551　☎01634－6－1415
枝幸郡中頓別町168

上杉　光子　〒005－0004　☎582－3920
札幌市南区澄川４条11丁目４－７

菅間　慧一　〒004－0002　☎897－3802
札幌市厚別区厚別東２－５－16－20

藤野　昌男　〒005－0012　☎583－2193
札幌市南区真駒内上町１丁目１－10－305

〔北海道野鳥愛護会〕年会費　個人2,000円、家族3,000円（会計年度４月より）　郵便振替 02710－５－18287
〒060－0003　札幌市中央区北３条西11丁目加森ビル５・六階　北海道自然保護協会気付　☎（011）251－5465